生涯学習としての家庭菜園

Home Gardening Coerces for Lifelong Learning

小松崎将一[1)]・中川　昌子[2)]
1）茨城大学農学部附属農場
2）東京農工大学大学院連合農学研究科

はじめに

一般の消費者・地域の住民へ、農業体験を通して、農業の今日的課題について社会教育を通して広めていくことは、持続可能な社会への理解を深める上でも有効であると考えられる。とくに、人々が暮らす地域社会－特に都市近郊部では、少数の農家と多数の非農家で地域社会を形成している。農業は大地から食糧を生産する限り、地域社会・コミュニティと関わっていかなければならない。しかしながら消費者は、スーパーマーケットに行けば食糧が整然と並んで大量に売られていると言う状況が当たり前となり、食物の価格や安全性には敏感でも、その食糧ができあがるまでの過程、すなわち農業には繋がっていない現状が多く見受けられる。

このような問題解決に向けて、筆者は、20年間にわたり大学農学部での農場実習や10数年におよぶ都市と農村交流を実践し，その中で農場実習や農村体験の持つ意義や役割について考察してきた（大崎ら 1988，小松崎ら 1998，小松崎 1994，1998，2000）。これらの教育プログラムを対象としてきたのは，主として農学に興味がある学生や社会人であり，子どもや高齢者などの幅広い層を対象としたものではなかった。

大学の法人化に伴う地域貢献が注目され、より市民向けの教育的貢献の機運が高まっている中で、茨城大学農学部附属農場では、市民向けの公開講座として「ゼロからはじめよう家庭菜園」（以下、家庭菜園講座と略す）を開講している。そこでは、地域住民に対して家庭菜園活動を通じて食と農をめぐる生涯学習教育を意図している。ここでは、その講座の概要について報告し、同講座のもつ生涯学習としてのあらたな視点について考察する。

家庭菜園講座の概要

平成16年度に開講した家庭菜園講座のシラバスを表1に示した。同講座は、4回にわたる講義・実習指導を中心としながら、各受講生は4 m×4 mの16㎡を家庭菜園実習用地として割り当てられ、そこで20数種類におよぶ野菜栽培を体験することとなる。種苗や肥料などの資材のごく一部は大学公開講座経費より支給されるが、多くは受講生の自発的な購入により実習活動を行っている。また、収穫物についても受講生が自発的に管理することとしている。

受講生は30～70代であるが、定年退職後の60代の受講生が最も多くみられた。多くの受講生は、いままで栽培経験がなく、これから家庭菜園を始めようとする初心者である。平成16年度は、21名受講し、最後まで栽培を継続しかつ講義に参加した者は20名であった。

表1　公開講座シラバス

ゼロからはじめよう家庭菜園 〈講座概要〉 家庭菜園を始めようと思っても，場所は？道具は？やり方は？などと戸惑っている方も多いと思います。この講座では，春から秋まで一定区画を家庭菜園体験圃場と農具を利用しながら栽培の基本的な指導もあわせてゼロからはじめる家庭菜園を体験するものです。
プログラム 4月17日　開講式・ガイダンス　家庭菜園の基礎 5月8日　栽培管理の実際 7月31日　夏野菜を楽しもう 12月11日　栽培を振り返って

家庭菜園講座の生涯学習としての特徴

同講座においては、自己管理的学習（Self directed learning）を念頭においている。自己管理的学習とは、学習を孤立化せずに、教師や指導者や教材や教育機関など種種の教育資源を利用して行われ、その特徴は学習者自身が自己の学習全体の計画、コントロールおよび監督の第一義的責任をもつことである（山田　1990）。

同講座では、実習用地として割り当てられた農地管理については、受講期間中は受講者が管理責任をもち、大学側のコントロールからは一定の「独立性」を確保している。また、受講生は種苗や苗あるいは肥料などの教材の提供や、作付計画に関するモデル案の提示を受けるが、これらの活用については受講生がイニシィアティブをとり、自己の栽培計画、栽培目標を選択実施し、それらの栽培結果を自ら評価するという栽培に関する学習過程全体における「主導性」をもち、さらに、栽培を通じて「自然に触れる楽しみ」「癒し効果」あるいは「収穫の喜び」などの栽培学習の意味や価値にかかわる課題に関する理解と自覚の中心となる「自律性」を持ち合わせている。

ここでは大学農場という教育資源を活用し、家庭菜園管理と個人的な学習活動と、講義および実技講習による集団的な学習活動から構成している。この学習をサポートする組織として講師陣のほかにボランティア学生や農家の方々などで対応している。その点で大学の公開講座という「閉ざされた教育援助システム」からの脱却し、地域に存在するあらゆる教育資源や教育機能の連携や協力の下に総合的に支援する「オープンな援助システム」の構築を目指している取り組みでもある。このような手法は、近年、大学機能に求められている地域社会との協働を意図しているものでもある（出相　2001）。

多くの生涯学習においては、学習の目標が受講生の個々にあることから、自己管理的学習手法を何らかの形で取り入れているものと考えられる（池田　1990）。しかしながら、本講座のように農地という学習資源を一定期間受講生の管理下におき、受講生の自発的な学習を促すという取り組みは少ないものと考えられ、独創性の高いものであると考える。

家庭菜園講座における学習目標設定

平成16年の中央教育審議会生涯学習分科会の中で、生涯学習社会という言葉をとりあげ、

「教育・学習に対する個人の需要と社会の要請バランスを保ち、人間的価値の追求と職業的知識・技術の習得の調和を図りながら、これまで優れた知識・技術や知恵を継承して、それを生かした新たな創造により、絶えざる発展を目指す社会である」とし、職業能力の向上、家庭教育の支援、地域の教育力の向上、健康対策などの高齢者への対応、地域課題の解決の5つの分野が示されている（文部科学省　2005）。

家庭菜園講座は、これらの5つの役割を潜在的に保持しているものと考える。栽培技術の習得は、個々人の生活能力の向上に結びつき、「食べ物を育成する」という家庭における食育に関わる内容を含んでいる。また、同講座には家族で参加している受講生が多く、そのため未就学児から高齢者までの多様な世代の方々が参加しており、受講生間の交流を進めることで栽培を通じた地域の教育力を涵養する可能性を含んでいる。さらに、栽培活動は、一定の全身運動を含んでいることから高齢者の健康対策としての役割を同時に持つことが可能である。

一方、農学部の位置する阿見町は農家の高齢化および後継者不足により、耕作放棄地が急激に広がっていることや[注)]、農地由来の土壌養分の溶脱などによる流域の水質低下問題など農業を取り巻く問題が多い（辜ら　2004）。そのため、受講生が家庭菜園という栽培活動を通じて地域農業や地域の自然環境に関心をもつ契機をつくる可能性もあるものと考える。

受講生の感想

平成16年度の同講座における受講生のアンケート結果を表1および表2に示した。まず、この講座を受講してよかったと感じたことをみてみると、まず、栽培に関しては作物の生長に喜びや感動を感じている意見が認められた。次に、栽培指導に関しては、初心者でも取り組んでみると作物ができることに感動している意見が認められた。さらに、自然にふれるとか栽培を取り入れた暮らしに感動する意見が認められた。これに対し、農業に対する意見・感想はあまり認められず、「農業の大変さを知った」という意見のみが認められた。

さらに、受講上よくなかった点については、取り組んだ作物の中には十分に栽培できなかったものもあり、それらの栽培指導がほしかったという意見が認められた。また、より多様な内容を受講したいというさらなる学習意欲が認められた。また、受講体制については、受講生間での交流や学生との交流を希望する意見が認められた。

表１　家庭菜園講座を受講してよかった点について

項　目	具　体　的　な　内　容
栽　培	トウモロコシやヤーコンが上手にできました。 作物の成長に合わせた作業が理解できた。 多品種を試してみることができた。 小さなものから形あるものが出来る喜びをあじわった。 自分で作付したものが収穫できてうれしい。 自分で栽培した無農薬の収穫物を口にすることができた。 日々成長する植物の力を実感した。 小さい菜園では作れないと敬遠していたトウモロコシ、枝豆、ダイコン、サツマイモなどが育つことがわかった。楽しめた。 多品種の栽培を試みることができてよかったです（苗や種の提供）。 季節の野菜つくりができた。 実際に野菜つくりをして予想以上によく出来たものや不作の物があり、いろいろな野菜の成長過程を楽しみながら見ることができました。
栽培指導	初めての体験だったので先生方のご指導の下で安心して取り組めました。 栽培の仕方を具体的に教えていただきよかったです。 ご一緒に受講された方と夏野菜の試食などで交流できてよかったです。肥料の使い方が大変勉強になりました。 土作り・肥料・剪定方法などの指導が受けられて大変よかった。 農具が常備されており大変たすかった。 講座だけでなく現場で実体験ができ先生方が現地指導してくれたこと。
農業一般	農家の大変さがわかった。
くらし・生活	仕事に生かせました（精神障害者福祉施設勤務）。 農場内がとても広々としているので普段の生活とは違う雰囲気を楽しむことができました。 適当な労働の楽しみを得られたこと。 収穫した野菜を食卓に出して家族に喜ばれたこと。 土に親しむ習慣ができた。 毎日の食卓が豊かになりました。 野菜を成長させるむずかしさ、土との関係、今まであまりおもってもみなかったことに改めて、とても人の心をなごませ、植物の心が通じたようにのびのびと成長してくれて暖かな心となり、諸先生方のご配慮に感謝申し上げます。
自　然	自然に親しめたこと。 野菜の生長をみて自然の偉大さに接したこと。
そ　の　他	初めてのことで失敗もありましたがよい経験となった。

表２　家庭菜園講座を受講してよくなかった点と今後の希望について

項　目	具　体　的　な　内　容
受講内容	出来るだけこまめに圃場に来るようにしていましたが夏場の作物の成長には追いつきませんでした。 菜物の収穫ができなかったこと。 収穫のタイミングと生育途中の管理がわからないことがあった。 秋の長雨で冬野菜の植え付けに失敗した。 カラスの賢さに脱帽。 種まきから収穫まで一連の全体像を始まりのときに教えてもらえたらと思いました。土作りからもう少し細かくした講座であればと思います。 身近な野菜全般の作付け時期・施設など一般座学。 土作りを体験できなかった。 土のこと、くわしい植物の知識、もろもろの机上での勉強も受けてみたいです。 無農薬でどうやって育てていけばよいのか（虫や病気に対して）。 害虫予防についての講義 ワンランク・アップを狙う機会増加を希望します。とくに土作り、肥料、苗つくり、連作障害、農薬など。 ３～４年　中長期にわたる家庭菜園つくりについて それぞれの野菜の作り方、収穫（方法・時期など）保存の仕方など一連したことを教えてください。
受講体制	もう少し畑の面積を大きくしてほしい。 苗・肥料が全員に行きわたらなかったこと。 開講の講義時間をもう少し多くしてほしいと思います。 学生さんと話をする機会があればと思いました。 年度変わりで難しいと思いますが、２～３月からの土作りや春先の作物つくりなども教えていただきたいです。 講座の回数を増やし、もう少し基本的な知識・技術の習得がほしかった。 講座とは別の時間帯で相談日があるとうれしい。 情報交換の日を決めてほしい。上手にやっている人の話をききたい。 参加者がコミュニケーションできるようなやり方

生涯学習としての家庭菜園講座の充実に向けて

家庭菜園講座での特徴は、生涯学習において直接経験（Directed Experience）の原理を活用し、さらなる学習意欲の向上と学習成果の獲得を目指している。掘松・森山（2001）は、最もよく学習者の自発性を呼びさまさせるものは、学習者が直接に経験しうる具体的な事物であるとし、学習者は直接に見たり聞いたり経験したりできるものに親しみを感じ、興味を覚えることを指摘している。この点で、同講座の受講生の感想をみると作物栽培を実体験することで、栽培活動のもつ役割やしくみについて理解を深め、かつ栽培の喜びや土にふれることの楽しさなど感じている受講生が多く認められた。また、この直接体験は、暮らしにおける食生活や身の回りの自然に関する驚きや感動に結びつくなど、生活の質の向上に寄与する可能性も示唆されている。

しかし、これらの栽培活動と指導のみでは、当該地域のもつ農業をとりまくさまざまな地域課題に対する理解が得られなかった。そのため、同講座の学習内容として地域の課題解決などの視点を導入していくには、実習と関連付けながらより広い視点での農業および環境に関する講義とあわせて開設していく必要性があるものと考えられた。また、家庭菜園活動を通じて、受講生間および学生とのコミュニケーションを図りたいとの意見も認められ、これらの点もあわせて取り込んでいく必要性があるものと考えられた。

まとめ

家庭菜園は、従来は「庭いじり」や「ガーデニング」などの個人的な趣味として発展してきた。しかし、家庭菜園は、家庭における「食」と連携していることから、現在の直面している「食」と「農」と「暮らし」における21世紀的課題を内含しているものと考える。とくに、消費者の食行動は農業のあり方に大きく影響していることから、家庭菜園活動は地域農業の理解・発展に結びつく取り組みへと発展させていく必要性がある。このような視点をとりいれながら、大学農場を活用した新しい地域住民向けの農業教育を展開していきたい。

注）茨城県阿見町における耕地利用率をみると、1970年には140%であったものが、2000年には80%と低下し、茨城県内でも有数の耕作放棄率を示している。

文献

出相泰裕．2001．大学と地域社会との協働．白石克己・佐藤晴男・田中雅文編．学校と地域でつくる学びの未来．159 − 176．ぎょうせい．東京．

辜松・小松崎将一・森泉昭治・牟英輝，カバークロップの利用と土壌窒素動態，農作業研究，39（1），2004，9 − 16.

掘松武一・森山賢一（2001）教育学概論．岩崎学術出版社．東京．

池田秀男．1990．自己管理学習．日本生涯教育学会編．生涯学習事典．36 − 37．東京書籍．東京．

小松崎将一（1994）都市住民における農山村地域資源の教育的活用に関する研究　第1報　稲作栽培を通した農山村地域資源活用の意義，農業教育学会，25（1）：51 − 56.

小松崎将一（1996）都市住民における農山村地域資源の教育的活用に関する研究　第2報　冷害にみる農業生産の困難性への理解，農業教育学会誌27（1）：1 − 7.

小松崎将一（1998）大学における教養教育として農山村フィールドワーク体験，日本農業教育学会誌29（2）：p61 − 66.

小松崎将一・林尚孝・池田正則（1998）農業機械作業におけるビデオ教材の活用，日本農業教育学会誌，29（2）：69 － 74.
大崎和二・月橋輝男・吉川昭雄・小松崎将一（1988）農牧場一般（基礎）実習の指導課題と問題点，茨城大学農学部附属農場報告，第1号：3 － 9.
山田誠．1990．自己教育力．日本生涯教育学会編．生涯学習事典．32 － 33．東京書籍．東京．
文部科学省．2005．生涯学習社会の実現へ．平成16年度文部科学省白書．105 － 128.